

日本水滸伝

上卷

特40

60

091210-000-5

特40-60

日本水滸伝 初編上卷

松村 春風 (操) / 著

M15

DBN-2058



玄風居士著

日本地志傳

鬼屋版

換骨奪胎
變化自在

明治壬午十一月

學海居士百川題



特40
60

玄風居士著

日本書道傳

息庵版

換骨奪胎
化自在

明治壬午十一月

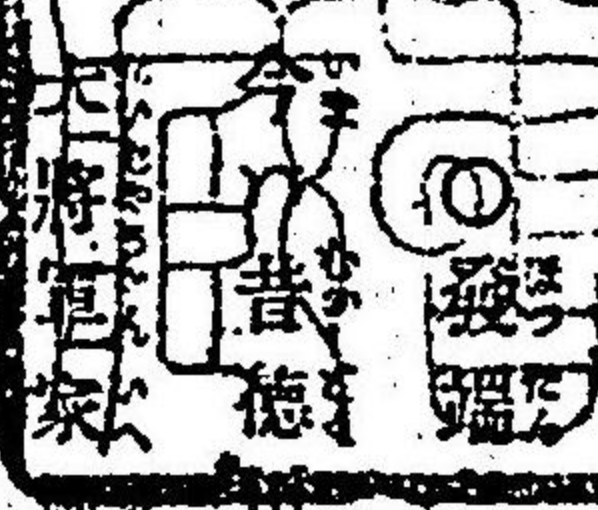
學海居士百出



一日友人来て曰らく水滸傳の作意の功妙なる和漢の小説其右
 に出るものなかるべしと云ふに譯本二書あるも何きも巻帙浩漭に
 婦女童幼小輒く之を讀了りがごとし吾子之れを平易に書縮めて
 やや徳瀨らきて俄にこれを讀する意となりにたるものなり尚彼書の
 俛にても人名都ての事兒女にも通じがごとし思へば仮に書中の趣を吾國
 事に摸換へ是を亦最を近き徳川氏末年の脚色となして遂に斯編を綴成し
 ぬと云い彼水滸傳の書ハ固より漢土の作物語なるものから宋江の事ハ宋史に
 見えまゝ三十六個の強人の姓名ハ聊異ある所あるも宣和遺事に記あり
 かれ全く無根の事にあらばざる故今吾國の事に摸換る時ハ痕迹を
 なまき虚談たたましむ是ハ小説の常なり且そのもの彼の書の譯本なれど
 けり谷も者ならんしと思へ遂に鉛活字にめりておぼく世に問はう
 明治十五年十二月
 春風居士 識

水滸傳

日本水滸傳初編上巻



今昔徳川氏政權を預奉らるゝ此の事になん天保五年六月五日巳の上刻に十二代
 大將軍家齊公大廣間に出座ありて政事を聽きたまふ時に監察列居る諸侯に向ひ事
 あらば早く言上せられよ事なくば各々詰所に罷出いへと呼りければ老中某列を進出
 て今江戸府内に虎狼狗と名くる疫病流行て民の死するもの數を知らず願くハ恩を
 施し刑を省きて天災を禳ひたまはよなき人民の福にて予いはめとす大將軍
 其儀を允させたまひ便ち天下の罪囚を宥し又諸寺に仰て加持祈禱を尽させたまへ
 どもさせる効驗もなかりしかば此儀いかいあるべきとて重て評議せられけりとの
 時少老松平上総守忠臣進出て稟すやう今此の疫病を禳ひはんにとて罪囚を
 宥めたまふも天これに感應まします諸山の名僧も其驗なきうへ下野國二荒山
 へ上使を遣させられ東照大權現に祈りたまひなばなご効驗のあらざるべき抑も
 大權現ハ信當家の先祖にわたらせられ乱を平げ民を安じ今ハ惠幸ふ神と仰がれた

まふなれば其魂天に座して常に國民安かれと譲り幸ひたまふとすすまでにもいはずされば今度の事の急に上使を二荒山に遣はしたまふに優すといはじと恐氣もなく聞えわけしかば大將軍感じ思召てさらば使者を遣はせとて給事中河野清麻掾洪信を上使として下野國へ遣はしたまふ去程に當麻掾洪信の數多の從者を引連れて翌朝江戸を發駕し夜宿り日歩ませ道をいうがしつゝ程なく二荒山の廟に着しかば當代の別當數多の僧を引つれ法衣をかきあはせ山門の外に立出て上使を迎へ先に立て導をしつゝ客殿に坐を設け大方ならず接遇しけり時に當麻掾洪信の別當に打向ひ小官此度江戸より來りつるよし即ち大將軍の命を奉て幣帛を捧むためなり其故の如此如此なりと通知すれば別當承りてさらば其式の準備に取掛りいふべしとて其夜の上使を憩はせつ次日より三十六坊の住職を召聚へ燭を點し香を燒き幣帛を神前に供へ奉り祈り聞ゆると三日三夜其儀式の嚴なるいふも中くおろかなれば今改めて記さず斯て式畢りて洪信のなほ一兩日逗留せしが次日別當に導引させて山中の名所を巡覽し世に聞えたる裏面瀑布などを賞をばりふたいひ

歩を回して廟所の後邊に到見るにこゝに一字の小堂あり戸扉を堅く閉鎖て大なる錠をおろし錠のうへに幾個ともなく封印ををし伏魔堂といふ額を懸たりければ洪信訝りて其故を問へば別當進みよりてすすやうこれの往昔典海僧正が此靈山に來りたまひし時一百八個の天狗をこゝに封じこめたまひしなり抑も吾國にて天狗と唱ふるもの彼の漢土に所謂天狗星などの類にあらで世に怪異をなす一種の妖魔にていふなり此者世にいづる時の常に人を害ひ災を布くなれば元和以降干戈こゝに戢りて世の太平となりたれば決して此者どもを再び世に出すべからずとて僧正の故らにかくの封じ込めたまひぬさるを世人が昔より此の二荒山に天狗多しと語傳ふるの全く此事を聞誤めしなりこれに依て代々別當たる者斯くの如く戸扉を封じて開くことを許さずいど告るを聞きて洪信の哈々と冷笑ひ世に天狗などといふものゝあるべしとも覺えず書籍などに見えたるもみな若せし人のすさみにこそ是の典海僧正の所爲にあらで此山をますく靈異にせんとする後の法師などの所業なるべし斯る物を世に残さば人を惑すの種ならん疾く此扉を開けよかし



松平 時光



どのへ別當の蓋きて其事ゆめく叶ふべからずも疑ふて開きたまは後悔
 を囁むとも詮なしと只管諫諍へども洪信つやく聽かずして遂に其錠を捨切らせ
 進入りて見るに内いと暗くして物の黒白も分らされば松明を振立させて見るに最
 大なる石塚ありて楷書もて天狗塚と彫りつけたり幾百年以降人手にや觸ざりけん
 蓋石の苔蒸て半土中に埋れたるを尙ほかにかくと檢見るに塚石の後面に遇日本而
 開といふ五字を彫てあり洪信件の五字を讀下て別當よくこれを見たまへ日本に遇
 て開くとあり日本の即ち大和なり國名の大和をも日本と書くためし古書に數多
 り我が官名を當麻掾とよぶ當麻の即ち大和の地名なりかれば我が此塚を開くべ
 きよしの二百年の以前より興海僧正のよく知りて斯の記したまひしなり今此下を
 掘て見ん疾く用意をしたまへかしとはげしく下知を傳へ尙ほも別當が諫止むるを
 罵罵しつゝ人夫を呼聚めやがて塚石を倒し蓋石を取除かせて掘ると六尺ばかりに
 して一の石櫃ありしかばさればころとて洪信の息をもつがせず下知するほどに人
 夫等の數百人寄集りて遂に其蓋を取のけしかども底の暗くして見えわかたず洪信

の松明を照らさせてよく見んとする程ころわれ忽ち方千の雷の落ちかへり幾
 億万本の竹を一時に打折く如き音して天を驚し地を動じ穴の中より一連の黒氣俄
 々として立のぼり屋棟を衝破り半天に棚引きつゝ幾千條の光を放ちて四面八方へ
 飛去りぬ是れ即ち後來一百八人の豪傑が世に出て事をなすべき兆どころの知られ
 けれこれによりて人夫等の迷んとして頭倒れ傷を被る者も少からず洪信の人々に
 先だち堂内を逃出て茫々として居たりしが流石に面目なくや思ひけん急に二荒山
 を出發て從者等への此事必ず人に沙汰すなど口どめして江戸に歸り去氣なく大將
 軍に復命したりしがこゝに東照大權現に幣帛を捧げ祈り奉りたまひし効驗にや程
 なく疫病のみな滅息て万民安堵の思ひをなしぬ去程に家齊公在職五十一年にして
 職を辞し家慶公に譲りたまふ文恭院と号し奉るの此家齊公の事なり家慶公在職
 十六年にして薨したまひ其第三子家定公職を襲ぎたまふ家慶公の證をバ慎徳院と
 申し奉る此時天下太平にして四方事なし是れ此書の發端なり洪信天狗を走らせし
 後の物語の次々の悉に見えたり

○第一回

こゝに江戸番町に住み食祿三千石を領する徳川家旗下の士の次男に高俵次郎といふものありけり父の早く死亡り今の兄の世となりたるが俵次郎の幼き時より物事に伶俐にして讀書のさらなり香立花すべて風流の業にいたるまで疎からずされども品行いと放蕩にして常に武士にのゐるまじき稽古所などいふ所へ入込み清元常磐津などいふ鄙曲を習ひ又北郭南品の青樓に入浸り内を外なる遊をなし果の債など出来たるまゝ町家の者をいたぶり苦むるよし聞えければ兄をばじめ親族等打集ひてかくて此儘捨置なば遂にの家名をも傷くるとなしとせず繁華の地に置んよりの暫く遠國へ預るに如かじとて其頃親戚の某といへるが大和國なる或地の郡尹となりて在勤せるわれに遂に其許へ預けしり俵次郎のこれによりて餘儀なく大和國に赴き面白からぬ月日を三年ばかり送りあけるうち江戸なる兄の偶風邪の心地にて打臥せしが原にて漸次に差重り果の瘧疾といふ病に變りて今の頗少く見えしかば親族等の大におどろき息あるうちに世嗣を定めての叶はじとて急に養子

の沙汰に及びしに一人がいふやうたどへ身持懦弱なりといへども現在實弟のあつるものを他人を養子と定めむもいかいなり不安心にいあれども大和なる俵次郎を呼ぶべしといふに理の當然なれば衆人もこれに従ひ遂に俵次郎を拜寄せけり俵次郎の兄の病氣と聞き扱ひ我を繼嗣と定むるならんと思へば今度バ殊勝願して江戸に歸來つ先年の放蕩を賠償などせしが衆人もまづの安心なりとてやがて順養子の届に及びしに程なく兄の遂に死亡りぬ斯て俵次郎の家督相続し武藏守と稱し實名は尙ほ幼名の一字を取りて行儀と呼び世祿三千石を領する身となりしかば初の部屋住の頃どの事替り自ら身持をも謹みけるが斯く非役にて過さんの残念なりと思ひもとより姦智に長け佞辨氷の流るゝが如くにて人を誑すにいと巧なる姦人なれば折を求めて權門に立入り初の土木惣監に擢てられしがそれより次第に登用せられたり活所に時の大將軍家定公薨したまへり是れより先に家定公の孫子なきにより紀伊宰相慶福卿を迎へては世嗣と定めたまひしが慶福卿の故大將軍家齊公の第六子齊順卿の孫子にして時に年十八歳なり慶福卿將軍家の世嗣と定らせら

れし後名を家茂と更めたまひ是にいたりて遂に武將の職を興ぎたまひぬ徳川十五
 代將軍と仰ぎ奉るの即ち此家茂公の此事なりかゝりしほどに此後權臣の更迭等わ
 りしかば高武藏守行保の其威勢強き上府に諂諛ひますく勢を得て遂に大監察に
 進み其威をさく熾なり去程に武藏守が大監察となりしと聞き旗下家人の職に在
 ると在らざるに拘はらずすべて其邸に來りて祝賀を述るにひとり講武所の師範
 役太田進太郎のみ來らず武藏守の進太郎の來見えぬを訝りて下僚に事由を問ふ
 に彼の久く病ありて引籠れりと答へしかば武藏守冷笑て彼死ぬほどの事にはわら
 じを絶て來らざるのひろかに我を侮るならんよし其儀ならば打捨ておきぬ詮
 術ありといふ氣色尋常ならず見えしかば小吏ひろかに危みて頼て人を走らせて進
 太郎にかくと告れば進太郎も驚きて據るなく病を冒し出て武藏守に見えしかば武
 藏守の聲ふり立てば身の太田進左衛門が悴にわらずやといふ進太郎答へて然りと
 いへば武藏守罵りては身が父進左衛門のさせる武藝もなき者なれども陪臣より取
 立てば直臣となされしすら尙上もなき恩惠なるを況ては身が拙き武藝を親の子と

おぼして講武所の師範役になされし身の程を辨へず虚病を立て我を侮る無禮さ
 よ疾く其罪を糺彈せんといきまくを下僚等諫止めて貴官今こよなき職に陞りたま
 ひ殊に目出たき事の始に人を罪なひたまはんのよろしき祥ども覺えいはず願く
 今日いまづ饒したまへとさままゝに賠償しかば武藏守稍く怒を止めてさらば今日
 の饒すべし此後も尙ほ非事あらば得ころ饒すまじけれといふ時に進太郎の始めて
 頭を擡げつゝ其面を見たりけるに豈に料らんや大監察になりたる重役の以前見覺
 えのある破落戸俵之助にてありしかば心中こはいかにと大に驚きながらやがて家
 に立歸り母に云々のよしを告げ彼の武藏守の當初部屋住にて身持放蕩なりし時前
 町なる商人の家に來り誣賴をなしけるを我が父通りかゝりて見るに忍びず彼をい
 たく懲しめたまひし事あり彼此事を心に憤り居るべければ彼が惡しと思むものを
 安穩にてのよも置くまじかれば我も遂に無實の罪を得んといふにすべきと
 打嘆ずれば母親聞て大に驚き然らむ時うかゞと江戸に在らんといふ危し三十
 六の計も走るをよとすといへば母子ひろかに他郷に走らんとし思へともいかにせ

ん老身年老い且逃行く處のあらざるをといひかけて早涙ぐめバ進太郎これを慰めて然思召すならバ兒子ひろかに爲む術ありろの如此如此と耳語けバ母親まきりに點首て閑談時を移しけり斯て翌日の未明に進太郎の起出で奴婢を呼びかねて我母持病あり久しく患みたまひしが漸くに瘥たりしを新井村の薬師菩薩にかねて懸けたる還愿に今日詣てんどのたまふにより我途を看護て行かんと思ふなり我のかねて妻とてもなければ留守の汝等に任するほどに大切に意を注よかしと言推へ又下部張介といふに吩咐て後槽より乗馬を牽出させ母の竹輿乗物を嫌ひたまへバ我も徒歩にて緩々隨從せん心得なれどもこの歸路の用心に牽するなりとてやがて家を立出新井村をさして一二里ばかり行きや、江戸の喬衢を出離れし時進太郎の急に足をどいめて呵呀いかにせん忘れたるどころあれ今朝しも物に取紛れて薬師菩薩に進献らする布施物を持来ざりき汝のこゝより引返して布施物を取て来よるの房間の閣板にありまかりとも我等母子の今宵本堂に通夜すなれば汝のいさぎて来るにも及はず今夜の家に休息して明日のつとめて迎に來よ馬の我が牽往て草料の

手づからものすべしといひしかバ張介の心を得て牽来りし馬を主人に遞與しとつかはしく家をさして走回りぬ進太郎今の心安しと喜びいろがはしく母親を扶けて馬に打乗せ自ら其轡を執りて牽立つゝ急に路引ちがへて板橋驛へ抜出これより信濃路をさして走行きけりかくどの知らず張介の命せられし如く家に立歸りさていはれたる處のさらなり家中隈なく尋ねしかども布施物とおぼしきものなし爲む方つきて翌朝のまゝに新井村に迎に行きしに本堂に進太郎母子の居す心いよゝゝ疑ひて寺僧に問ふに通夜せしものならずと答ふこれによりて張介の空しく家に立回り同儕に此由を告げ定めて外へ廻りたまひしものなるべければ日暮までにならるくも歸りたまふならんとて待てゝ其夜もむなしく明ければ奴婢等の大に不審を起して察するに我儕が主人公の母子ひるかに示合せて出奔やしたまひけんぬな笑止やと隔合て其日の諸共に彼處此處を尋巡れども絶て行方の知れざれば已むことを得ず件の事の趣旨を拘該へど届出づ去程に大監察高武藏守の進太郎が母もろどもに江戸を出奔せしよしを聞いていよゝゝ惡憤りて俄に執政に披露に及び文

書を諸國に觸廻して進太郎母子を擄捕て差出すべしと告示しけりこれの借置進太郎の途中にて一蓋の管笠を買ひこれにて深く面をかかし母を乗せたる馬を追て中仙道へと出しかと本街道の人目われ故らに支路を迂りつゝろこはかどなく野を過ぎ崗を越えて旅寐に日をかさね行々て上野國赤城山の傍近き處を過るに日巳に沈みける頃に思はず宿をとりおくれ彼處此處と尋ぬるほどに近く見ゆる林の中より一道の燈光祭々々見えければ馬を早めて林の中に入て見れば即ち一構の郷士とおぼしき人の莊院あり進太郎漸くにたどりつきて一夜の宿を求めしに主人の六十ばかりなる老翁にていとこゝろよく承引て奴婢して進太郎母子を一同に休ませ飯をすゝめ湯に浴らせ馬を厩に繋ぎて草料を飼はせなどして懇に接待しければ進太郎母子の其情を悦び聞えつゝやがて臥床に入りて眠に就きぬ其翌朝主翁のどくに起出しにはや日の昇るころほひまで行旅の武士の未だ起ぬる障子の外邊よりしていかに客人起きたまはずや夜はどくに明ていなると呼はれば進太郎いうがはしく走出て小人の疾くに起ていへども此頃旅の勞れにや母にていものが夜半より

り心痛起りて苦めりといふに主翁の驚きてうのいと便なくをはするならんいつまでも逗留して徐に保養したまへかし幸ひに我家に心痛を治す妙藥ありを取出して進らすべし必ず遠慮したまひると言慰めたる主人の恩恵に進太郎母子の深く感じて此處に逗留しまばらく養生したりしかば五六日にて母の病の瘥えにけりこれによりて進太郎の明日のつどめて出發んと思ひ先づ馬を見ばやとて背戸の方に立出て只見れば傍の空地にて筋骨いとたくましげなる一人の後生跣足になりて武藝の演習をしつゝ竹刀を使ふてありけり進太郎暫時これを見て太刀すぢの巧能なれども實地の用にい立ちがたしと獨言し聲の漏れてや件の後生の回首て此旅人何をかいふ我が本事を拙しと思ひなば立よりて勝負を決せよ疾く此處へ來らずやといきまく折から家主の老翁いうがはしく走來て客人よ心にな掛けたまひる彼の老身が悴なるに生れつきたる質にやあらん幼時より武藝を好み日夜これを演習せり今いかく士民に雜れども先祖の由緒ある武士にて代々郷士と稱られ領主の允許を得て兩刀をも帶む身なれば老身悴が爲すをといめず既に兩三人の師をどらせてい

さゝか槍太刀を習ひせしかど覽たまふごとく其の伎倆尚ほ鈍かり所詮彼が望なれ
 ば打すゑて廢人となしたまふとも苦しからず願くの一太刀あてゝたまひぬと只管
 に請求むるに予進太郎の兩三度辞するといへども許されぬば然らば是非に及びが
 たし無禮の饒したまひぬと承引ければ後生のいふにや及ぶと勢猛くろのまゝ屋裡
 に走入て壁に懸けたる竹刀四五本と演武甲二三領をとりて走出いづれなりとも撰
 みとられよといふに進太郎の合笑て我の得物に嫌ひなく又面小手を着るにも及び
 ひのじといへば後生のますく、熬て長竹刀を執るより早く立揚りて上段にかまへ
 つゝたい一打にと打くだすを進太郎の短竹刀をもて忽ち丁と受とめ附入て打たば
 打ちも倒すべけれど尙ほ徐々どあしらひて二足三足退歩にければ後生の踏込てふ
 たゝび打たんとするところを進太郎すかさず刎かへせば後生が竹刀の遙にけし飛
 て其身も撲地と倒れたり進太郎の竹刀を棄て走りよりは身に傷我のなかりしやと
 會釋をしつゝ扶起せば後生のいろがはしく磕頭て我眼ありながら人をも知らず身
 をもはからせてこよなき無禮仕りぬ饒させたまへと身の過を賠るになん父の老翁の

且感じ且悦びて進太郎を引て後堂にいたり奴婢にいひつけ酒肴を取らさせて進太
 郎母子にすゝめさて老翁の進太郎に向ひて定めて客人の武藝の師範をなしたまふ
 致頭ならんつゝましからずバ語開けたまへかしと問ふに進太郎の辞むによしなく
 打點頭て今の何をかつゝみはん小人の江戸講武所の師範役太田進太郎といふ者
 なり父進左衛門の代より幕府の直臣となり小人にいたるまで二代武藝の師となり
 しに如此這般の事により高武藏守に憎れて禍此身に迫りしかバ已むとを得ず母を
 伴ひ信濃國なる中野里に我が武藝の門人ありて家富める者なりとし聞けば其許
 に身をよせむため故と支道を経めぐりて宿どりおくれし夕暮に歸らず惠を受し
 みならず母の病の日ならず癒りはてしと是れみな厚き情によれり斯までの報恩に
 小人が覺えし業のかぎりは賢息に教授せんといふに父子のいたく悦び互に其志の
 ほどを謝したりしがこの時老翁の又詞を改めて老漢の家代々郷士にて史喜太夫と
 呼ばるゝ者なり義祖の下野國宇都宮なる本多家の隸屬なりしが彼家没落の後此地
 に漂泊來て其後敢て他家に仕へず武士の浪人にて世を立通せしかバ領主もまた士

民をもてこれを選ぜずいさゝか田畠を所有なしを莊戸に佃らせて世を送ると老漢が代にいたるまではや十二三代となりたり又此處の里の名を史家村と呼べし上野國佐位郡に屬したり此村中の百姓の大率三四百戸あれども皆盡く我家とひとしき史をもて氏とすなり老漢の幸なくて兒子少く唯此村一人を持てしが俸の田畠の主使などいせてたゞ武藝をのみ好み又物毎に丸籠九個を彼九曜とかいふ徽章の如くつくるを好み覽たまふ如く衣服の徽章も袴の模様にもみな悉につけたれば里人らあしなべて九紋龍進之助と紳名を負せて呼ばれ角瓶の名かなんどの如くにて老漢のもより好ましからねども人の呼ぶなればまた詮術もなきとにころたゝ願くは先生よきに教授て物の役に立つべき者ともなして賜はれかしと又他事もなく請聞えつ遂に師弟の契を結ばせける去程に進太郎の習覺えたる槍太刀又の柔術の秘傳を日毎に進之助に教へしかばあよう半年ばかりにして進之助が武藝上達してまた侮りがたくなり見えにけるかゝりしほどに一日進太郎の進之助父子に打向ひ月ごらの待遇を悦聞え今のはや進之助との武藝上達せられたればいさゝかも

たるとなしかゝればかねていひつる如く明日の引別れて始めよりころさす信濃路へ赴くべしといふに父子のわりなく留めて願くは此處に一期を過したまへかし斯る偏僻たる田舎なれば江戸より遠くはならずともまた聞ゆべき憂もなしといふを進太郎固く辞みて志のほど辱けれども留る身にしあられ明日のつめて出發なんど別を告て留る氣色なかりしかば進之助も爲む方なくて父と謀りて送別の筈を開き酒をすゝめしうへ饒として方銀三十兩と旅衣二襲とを贈りけり其翌朝進太郎の母親を馬に扶乗せ喜太夫父子に告別して立出れば進之助の路程三里ばかり送行き餘情の尽じこれにて袂を分なんど進太郎にとゞめられ餘儀なく涙を潑て別れにける太田進太郎が事此未去ばらく話説なし漸て其後進之助のすく武藝を勵みつゝ過去どのなしに三四個月を送りしに父の喜太夫の或時風の心地とてかりろめに打臥したるが原にて醫療の効驗もなく遂に空しく黄泉の客となりしかば進之助の向に母を失ひ今又父にあくれれば其哀いはむかたなく厚く亡骸を野邊送して跡懸に吊ひけりまかれども進之助の尙ほ耕作の業をバ務めとせず其身



松高吟光

い、莊戸の中にて年少く武藝を好む者を呼聚て常に太刀槍を教へなごしつゝ爲す事も
なく月日を送るに早くも父が死亡しより又も三四個月を経て天いと熱き六月の
頃どぐなりぬ進之助の此程の暑の堪へがたければ屋後の打麥場なる柳の樹蔭に竹
棚をおきわたし尻打掛てたゞひとり對面の松林より吹來る風を貰るほどに背戸の
方よりうろくくと入來て此方を張望くものわり進之助眼早く見どがめてる何者
ぞと喝りつゝや、立よりてつくつく見れば折々來ぬる獵戸の李吉なり進之助冷笑
てあな汝の何事ぞ我が莊内を張望くの今宵の脚頭を相んためかといはれて李吉の
會釋をなしいな何事もいはず莊上の丁男乙藏を誘ひいだして一杯飲んと思ふて來
ごとの來しめども大郎が其處に坐たまへば尙ほ呼かぬて匿れしのみといへば進之
助の面を和げろれにてもあるべきが汝の年ごろ雉山雞などを折々持來て
賣りたりしになどで此頃の持來ぬぞと問はれて李吉さればとよ我々が常に衣食
とする彼の赤城山に近頃三人の盜賊住みて其部下いと多く山中に樂を構へ馬を
畜ひ其勢をさくく熾なり這般の障礙あるにより人々みな恐懼れて鳥獸のあろかな

を山に入りて薪を拾ふものだになしと告るを進之助聞訖りて我も破山に盜賊が接
むよしの聞きしかどさまでこの事どの思はざりきそのとまれ雉などおらば持來よと
訊ゆれば李吉の心得て會釋をなして立回れりかゝりしほどに進之助の思ふ旨われ
ば酒食を安排て急に人して一村なる莊戸をことごとく呼集め杯を把りてまづこれ
をすゝめさせさて容を改めて各々もかねて知らん近頃赤城山なる強盜等此處彼
處なる村々を打開せて人を害ひ物を奪ふと風聞已にかくれなしまからば彼等の我
が村へ押寄來んもはかりがたし那所等もし寄來るならば搦捕て手効にせんと思ふ
なり各々もみな相圖を定めて盜賊らが來ると知らば走集り力を戮せて働きたまへ
其相圖にの柳子を打鳴すべければ必ず怠りたまふなかれと指示せば衆人の一儀に
及ばず我々の愚なりどもかくにも大郎の指揮に従ひいふべしと異口同音に答へ
つゝやがて己が宿所へ思ひくりに立歸りぬさても此赤城山に盾籠りたる三人の賊
首といふのいかなる者ぞといふに其第一の頭領は朱野武右衛門といひ第二の陳田
達五郎といひ第三の楊葉春四郎といひつれも武藝を好て力量あり此三個の強

人等各々故ありて故郷を立去り今身の置所なきに赤城山に引籠り數多の嘸囉を聚めつゝ各々近國の富家を劫し物を奪ひ金銀を振納て寨内に貯へたりされども又一の法則を立て貧人を恵み婦女を姦せず又みだりに人を殺さずもしこれを犯す者われハ忽ち山寨を逐出せりかくて武右衛門達五郎春四郎の三人の賊首の一日酒を飲みかはすほどに武右衛門がいひける我々此處に居籠る事江戸に聞え今現に捕吏を用意して差向られんとするよしの風聞ありもし許來らば我々これを禦ぐべけれどたい此頃寨内に米穀乏しくなれ、これを取納れんと肝要ならんといふを春四郎聞あへず然らば玉村へ赴きて數多の米を借て來ん暫も猶豫すべからずとはやるを忠右衛門押しめて玉村へ赴かば路のほど近けれどもみなじく山路越えて淺間山の北に廻出て信濃路をはたらくべし其故の玉村へ赴くに史家村を過らぬハ彼處へハ至りがたし彼村に音に聞えし九紋龍進之助あり彼いかにしておめくど見通して我々を通すべきか、れハ信濃路へ赴くに便すことあらじと言論すに予達五郎もげにもと悟りて哥々の詞極めてよし彼九紋龍が武藝のほどの中々

侮るべきにあらざと詞を添て諷むるを春四郎のかやくと冷笑てなごてや身兩位の別人の武勇をのみ褒て自己の威風を減したまふ予た一人の九紋龍が何程のとかのあるべきよし、我が本事を高處にて見物したまへかしと言すて、立上るを武右衛門達五郎の兩人の尙左右より諫止むれども血氣にはやる春四郎のいかて耳にも懸くべけん俄に小嘸囉に下知を傳へつゝ黒色の小袴三才羽織をり、しく、ひ長刀を把て腰に横へ勢猛く山寨を立出れば部下の者ども三四十人前後左右に引從ふて鋭々聲して麓をさして走下れり去程に此事早くも麓の村々に聞えければ人々の驚迷て手足の措所もなきどころひとり史家村の衆人のかねて期したるとなれば少しも驚騒ぐ色なく柳子鳴して各々鋤鎌用心棒又ハ山刀などを引提て早くも史が莊に走集りければ進之助悦勇みて其身ハ九龍の徽章九個つきたる演武甲の胴を着禰高袴の股立高くとりわけ白綾もて額をまかど結び勇氣凛々として數十人の莊戸を従へて村端の路口まで押出し寄來る敵を待つどころ程もあらせず山賊の嘸囉て早ひしと押寄せ來つろの時春四郎ハ進出て進之助を慶きつゝ目禮すれば進

の助聲高やかに叫ぶるやうやをれ盗賊ども汝等山に盾籠り人を劫し物を奪ふと聞
 えしかば我捕捕て天誅を加へんと思ふといど久し今此處へ來りしこそ幸ひなれ疾
 く首を渡さずやと罵笑へば春四郎大にいきまきて憎き豎子が横言かなさいふ汝が
 首をどらんと怒りつゝ長刀を打振て切てかゝるを進之助早くも立迎へておなじく
 三尺餘の刀をもて受どいり人ませもせずたゞ二人暫く挑闘ひしが隙をはかりて進
 之助と一聲附入て春四郎が刀を打落し忽ち腕差伸べて取を握握み高くさしあぐ
 ると見えしが三間ばかり彼方へどうと投つけたり隙もあらせぬ莊戸等走よりて忽
 ち捕へて高手小手に縛めぬ此体を見て小唄囉の戦はんとする擬勢もなく我先にと
 山をさして逃歸るを衆人の逐かけし思ふがまゝに打懲して何處までもと長運す
 るを進之助の早十分に勝ちたれの事今のこれまでなりとて貝吹鳴して味方の者を
 呼聚め生捕りし春四郎を引たてさせて我家へと歸りけりさて赤城山の案にての
 朱野武右衛門陳田達五郎ら春四郎が事を危みていかいやせしと打語らふ折しも打
 散されたる小唄囉等息も絶えしにて逃回り春四郎の如此如此にて遂に九紋龍に

生捕られたりと報告すに予達五郎大に驚きていかにやせまじと立騒ぐを武右衛門
 急に押し止て我々とても彼進之助に力を用て敵しがたし今春四郎を救回らんとい
 急地に計りなば方に一も成就するにあらんこれより外に手段のあらじと思入て耳
 語きければ達五郎の議極てよしと點首つゝ頼て小唄囉をも従へずたゞ二人にて
 史家村へと赴きぬ去程に二人のすこゝとして史の表門より入り玄關の前なる大
 地に平伏してひたすらに恐入ていどて賄るに予進之助の案にたがへて汝等二人の
 赤城山なる賊首ならずや何ゆゑ來りてかくの罪を謝する予と問へば二人の首を擡
 て我々もどより好て強人の群に入り不義の榮耀を極めんとにあらざれどもたい
 佞人に迫られて四海の内身の置所なきまゝに赤城山に籠りし日より三人かたき義
 を結びてたどへ同日に生れずともたい同日に死なんと誓へり志かるに春四郎の
 我々が諫を用ひず誤て虎の威を犯し既に擒捉にせられたればこれを救はんといど
 難し所詮三人が運命はこゝに極りたればたい願くば三人諸共索うちかけて官司に
 送りたまへかしは手に死なんと我々が本望なりといひつゝ兩眼に降洒ぐ涙の深布

なす如くなり進之助つくく見聞て心の中に思ふやう此者ども盜賊ながら義を
思ふと斯の如くなるに我今擄捕て官司へ差出しなば世の好漢に心なき者と笑はれ
ん古より大蟲の伏肉を喫はずといふにわらずやと尋思頼に定りければ武右衛門達
五郎に打向ひて汝等がいふ所我心に感ずるよしあり因て春四郎を放釋して還さん
と思ふなりといはれて二人の尙も磕頭て志有りがたくいへども然る時に英
雄を連累せん恐れありたい諸共に官司へ引渡し實を請受けたまひぬといふに進
之助のますく感嘆してかくまで義あり信ある汝等を我いかて繩目の耻を興ふべ
きとて遂に春四郎を解釋し此事もし官司の耳に入りなば釋さんにも釋しがたかる
べし疾く伴て行よかしといふに三人のひれふして此大恩のいつの時にか忘れは
んど又今更に感涙袖をひたしつゝ數回伏拜て赤城山へ回りけり斯て五六日を経て
武右衛門の達五郎春四郎に相談してさきに我が計圖に中て辛く楊葉大人を救得し
かども是れみな九紋龍が義に勇みたる心よりして願く放還せしなりさらずはいか
てかく無難なるを得ん今其大恩を報はむためにいさゝか禮物を贈るところよけれと

て一夜月暗きに乗して小唄囃に絹帛熊皮を齎して史家村へ進しけるに進之助初
打笑て受けざりしに小唄囃がかくて頭領の失望も察からずと勤てどいまる氣色
なきに予進之助も又折角の好意をもて贈來しものをむげに辞むと却て心なき業な
らんと思ひかへして遂に受收め小唄囃に酒など飲せて還しけり此後進之助より
回報の品を山樂へ贈遣しゝか山樂よりもまた時新の物などを贈越して史家村と
赤城山との間往來ひろかに絶えざりけり既にして秋もはや真中となり十五夜に近
きしかば進之助のいさゝか武右衛門等と談合するとのわれ十五夜に彼等を招
き盃をすゝめながら語合ふべしと思ひにければ十四日の下午に一封の請書を書寫
めいつも山樂へ使に行慣れたる莊客注四郎にこれを齎らせ赤城山へ遣しければ武
右衛門等三人の來書を見て喜ぶと大方ならず注四郎を懇に接待て思ひのまゝに酒
を飲ませ回書を書寫てこれを渡し又注四郎に金五兩を取らせしかば注四郎大に
悦び山樂を辞して立出や、麓近く下來りし時常に禮物など持來て面識なる小唄囃
に出遇しかば小唄囃の折よしとて注四郎を山下の小酒店に誘行てこゝにても厭

まて酒を勤めしかば汪四郎の醉ますく、のぼりて一歩の高く一歩の低く踏々とし
 て酒店を立出つゝ史家村をさしていうくほど日既に暮れはてたりさし昇る月
 の光を笠に戴きつゝ麓の裾野を過るをり餘に頭の重ければ芝生の上に暫時憩ひし
 に酔ふたる者の癖なればろのまゝ其處に眠りこけて野の聲のみ高かりける清處に
 獵戸李吉の麓の林を狩暮して家路をさして立回るに只見れば路の傍に酔倒れたる
 者あるを立よりてよく／＼覗ればかねて相識れる汪四郎なり搖起せどもいたく酒
 にや酔たりけん前後も知らぬ体なるに懷より膝の半露出て中のいさゝか重げな
 れば李吉の忽ち慈心起りてやゝ引出して改見るに中より一通の書状はたりと落散
 て金の三兩と天保錢五六枚ありの時李吉の書状を拾上て月光に照し讀むに讀め
 ぬながらも武右衛門等三人の名のみ確に讀得たれば且驚き且悦び肚裏にて思ふや
 う前日進之助の我を疑ふて脚頭を相ねくかなんとと咎めしが彼の却て赤城山なる
 盜賊等と志ぬびやかに交れり今此事を訴出なば賞錢の沙汰あらん是の思ひがけな
 き金の蔓を得たりけりといひとり點首つゝ書と金子とをろのまゝに奪取て足早に郡

卒廳をさして走行きけり去程に汪四郎の其夜九時のころほひ酒やうやく醒て慌忙
 きつゝ身を起して懷を摸見るに膝のあらずこのそもいかにと驚きて尙那首此首
 と尋ねしに空膝のみに芝生の上に打聚ありその時ひとりつらく思ふやう金のも
 どより惜けれども又思ひあきらむれば事済むべしたる回書を失ひて立回りて言
 譯あらずいかにやすべきと愁悶へしが屹度肚裏に一計を生じていろき家に走回り
 しかば進之助これを慰勞ていかに回書が来ずやと問ふに汪四郎詐答へてさんは彼
 の三個の頭領たちの回書をまゐらせんといはれしかど小人山樂にていたく酒を強
 ひられたればもし途にて失錯あらんを恐れいな十五夜に来ますることの相違だに
 なくばは回書に及びはしと答へてろのまゝ立回れりと賦しやかにいひくろむ
 れば進之助の志きりに點首て其才發を褒めたりけり斯くて十五夜になりければ武
 右衛門達五郎春四郎の三人の小頭目に吩咐て山樂を守らせたい三四人の嘍囉を従
 へつゝ忍びやかに山を下りて史が家に來りければ進之助これを東樓に迎入て準備
 の酒肴を安排べ詩歌の嗜なけれどもひたすら限なき月を賞て打興する折ころわ

れ堀外俄に物騒しく人の足音すさまじければ進之助樓上よりきつと見るに本地の郡宰泥尾捉藏警述數多を引具して早ひたくと密來りて強賊等を取な逃しると時はりく門外にひしめきたり

○第三回

るの時武右衛門達五郎春四郎三人のこの聲を遙に聞て進之助に打向ひ事既にこゝに及べるうへに早く我々に索掛て郡宰に引渡し連累を免れたまへといふを進之助聞あへずるの何事をいはるゝ予尙志かする時にいひ身等を賺奪て懸にかけ賞を得しと天下の人に笑はれん所詮通るべくに共に遭れ死すべくに共に死なん必ずはやりたまふなかれといひかけていろがはしく走山梯子を楯に打撃てすらくこれに攀登りつ門外を見下していかにかに人々誤ちたまふなかれ我いさゝかも罪を犯せし覺えなしさるに何人を召捕んとしたまふ予といひせも果す捉藏のいきまきてやをれ曲者陳ずるなかれ今宵赤城山の強盜等汝が家に來りゐると證人ありて顯然たり李吉とく來らずやと呼いれバ李吉志たり顔に進みよりて高く冷笑ひ進之助どの早

かくなりての進も通るゝ路のなし一昨夜武右衛門等よりは身に送る回報の書を我はからずして拾得たれば可借口に風ひかさずとも早く種目を受けたまへどさも惜さげに罵りけるされども警述等もかねて進之助が武勇を知れゝバさうなくの戸扇を破りて進人らずたゝ門外にひしめくのみ進之助の再び捉藏に打向ひ事已に露れたれば今早是非に及ばず武右衛門等三人を捕捕て出すべし楯且圍を退けたまへと呼りつゝいろがはしく屋裡に走入り金銀を收拾て莊客に取持しめ忽ち家の四方に火を放て烟の中を驚迷ふ汪四郎を主を欺く不忠の曲者まづ汝より血祭せんとてたゝ一刀に斬りさげつ表門を楯と押開き勢猛く切て出れば武右衛門等三人もなじかひ少しも猶豫すべき皆一齊に長刀を振廻しつゝ切て廻るほどに捕緝の人数傷を被る者少からず此幕様に辟易して忽ち四方へ逃散りければ李吉も是の叶ひじとて逃出すを早くも進之助が斬下て兩段となしたりけり其勢とても敵すべきにあらざれば捉藏の命からくにて逃回りぬ去程に進之助の思掛なき郡宰の叔人に取圍まれ勢已むを得べきにあらぬバ多勢の警述を切散し武右衛門等諸共に一先赤城山

に落登りしかば武右衛門等の進之助が義を重じ生を輕する志にますく感服してこれを敬ふと大方ならず日毎に厚く待遇しけれども進之助の體々として喜ばず肚裏にて思ふやう我もとより犯せる罪のあらざれども人に信義を失はじと思ふより今の大方ならぬ罪人となりぬさればとて今更に此山中に足をどいり盜賊よ博徒よと世人の輕侮を受けんとも思はねば我師なりける太田進太郎ぬしの信濃國中野里なる豪家の許に身を寄するといはれし事ありこゝより信濃國への程遠からぬ隣國なれば一先彼處へ尋往き身の落附を謀りなばまた良工夫もあるならんと胸に問ひ胸に答へて思案頼に定りければ武右衛門達五郎春四郎の三人に別を告て旅衣を整ふるほどに三人のひたすらこれを押止て願ふのこゝに留りて後々後國をなしたまへもし落草を嫌ひたまはば我等も亦良民に立かへりてどもかくもして哥々を過しまらすべしと詞を尽して留むれども進之助の頭を掉て我心既に定りたれば強て詞を費したまふなかれとて史家村の家より帶來りたる奴婢等の藥に殘留りて汝等の麓へ下るとも又のこゝに在らんとするの心のまゝにせよとて其者どもの事

を與々も武右衛門等に頼聞えつ其型朝尚ほ三人がかにかくと留る袂を振拂ひ遂に告別して立出けり赤城山の事此後まばらく話説なし去程に進之助の赤城山を立出て本街道の憚りあれば問道をめぐりて淺間山の北なる麓にたどり出こゝよりの故郷を去ることや遠く我が面を見知れるものゝ絶えてなければややく心安きものから尙ほ韭山笠もて面をかくしつゝ五六日を経たる後やがて信濃國なる木内郡中野村に着きにけり此處の村といへど世に名高なる善光寺の在る里なれば富有の商家軒を列べ出入る他國の參詣人絶間なく其繁華なること中々十五六万石の諸侯の城下への讓るべくもあらず進之助のや、街に進入て善光寺の大門前にいたりしに只見れば敷石の傍なる小店の軒前に休所と記したる招牌の行燈をかけたるあり進之助のうがはしく立よりて床机に尻を打掛て汲出す茶を飲みながら茶店の女に打向ひ此邊に江戸より来たまひし劍術の師父太田進太郎といふ人の寄食をらるゝ豪富の家にあらずや繁華といへども小市街知れざるものよもあらずと問へば女の打笑て此邊の豪家の此頃劍術を好む者多く各々江戸より招きし師父も多けれ

ばとばかりにての知れがたしあな笑止の尋物かなど事慣れ顔に答ふるをりから面
 圓に眼鏡く色はわくまで黒くして身の長あよろ七八尺ばかりもあらんと思はるゝ
 大漢が身に黒木綿の紋つきたる裕衣を着小倉木綿の白地の袴の膝ばかりなるを
 穿きいと長やかなる大小の刀を一束に腰に握みさしにし大踏歩に歩み来て此茶店
 の床机に腰を掛けしかば茶店の女の會釋して茶をすゝめつゝ進之助を回顧りて旅
 人只今問はせたまひしことこの道位に問ふて見たまへ知りてをばすることやばへ
 らんといふに進之助點首つゝ床机を立ちて會釋をなし事いたく卒爾にいへども
 問ひまつりたき一儀あり此邊の豪富の家に江戸より來ましたる太田といふ劍術の
 師の寓し居らるゝを知りたまはずやと問はれて件の大漢もあなじく禮を回しつゝ
 ろの太田氏といふの我も嘗てろの名を聞きぬろの江戸講武所の師範役にて高武藏
 守に懸まれて此國に連れ來りし太田進太郎のことならずやといへば進之助の破頭
 ていかにも其者の事にていふに件の大漢のうれならは當國高井郡なる中野町
 の豪家のもとに匿れあるよし人のいへり抑も此信濃國に中野と名くる土地二所

ありて一の村にて即ち此處なり又一の町にて高井郡にありてまかも下郡に属せり
 されども此處なる中野村の善光寺の大伽藍ありて其名全國に聞えたるゆゑたい中
 野と聞く時の往々此處に尋來る人ありさりながら彼中野町も森邑にてをさゝく繁
 華なる地なり倘太田氏を尋ねんとしたまはば彼高井郡へ尋ね往きたまふよよから
 ん此處より高井郡へ往きたまはんに路の如此如此なりと教示せば進之助の嗟嘆
 してさて思遠へしなりたい中野と聞きしを心當に一圖に此處へ尋來し我なが
 ら最疎漏ありしさいのいへ同國中なれば又尋行むも難きとにあらざとまきりに失
 望の色面に現れしかば大漢の打慰て今更悔ひたまふも其詮なし先刻よりつらと
 身の形相を視るに尋常の無氣力武士の類にあらざ定めて一際ある豪傑なるべし
 苦しからず語りたまへかしと問はれて進之助辞するによしなく四邊をひろかに
 見廻して今の何をか包みいへき某事の赤城山の邊なる史家村にて成長りし史進之
 助と申す者にていど聞きもをばらず大漢はたど手を拍てさての近遠に隠れなき
 九紋龍ぬしにてをばせしよな某の姓名を魯智野深右衛門と呼びも九州龍なる武

る諸侯の藩士なりしが同藩の士と狡童の事よりして争論を起し既に及後にも及ばんとせしに此事早くも國老の耳に入り兩人とも体祿を召放されて遂に流浪の身となりぬ因て某の先年江戸邸在番の初偶懇志を結びたりし松代の藩主眞田侯の家人何某が今の此處より一里ほど距りたる丹波嶋の郡宰となりて在勤せるよしを聞きしゆゑこれを尋て下來しに彼者最こゝろよく引受て遂に藩士に推薦して今にての彼郡宰廳の應捕となりぬ父母ともに舊藩に居りし頃疾に死亡り固より婦女の嫌ひなればいまだ妻とてあらざるゆゑ獨住にて彼廳の長屋にありぬ身の事も聞くと久し尙ほ語らふともあらんほどに此處の人の往來もいと多しいと諸共に立ちたまへ行て一杯酌交さんにとわりなく立て誘へば進之助も亦喜びて立出んとする時に深右衛門の後邊を回顧て茶錢の明日にも又來つる時我が取らすべき予といふを女に聞わへず何かの茶錢に及ぶべき心遣をしたまふなどいひつゝ跡を見送りけり去程に進之助の深右衛門に誘れて行くと五六町にして只見れば最廣やかなる街の傍に衆人立集て黒山なすあり兩人の何事ならんと思ひ衆人を押分け進入て見るに一個

の漢子が高足駄を穿き大太刀を抜き白を演べつゝ香具を賣るにてありけり進之助よくく視るに豈に料らんや件の者の初め進之助が武藝の師なりける李田忠次郎といふ者なりしかは是のるもいかにと驚きつゝいふ其名を呼びかけて互に無事を祝するを深右衛門の傍よりして聲をわけば身史氏の師父ならば我々とともに來れよかし一杯飲むと思ふなりといひれて忠次郎の會釋をなしるの辱きことにごろさりながら我の今少しく齒磨藥を商て跡より緩々參るべしと答へてふたゝび衆人に打向ひ物を賣らんとするほどに深右衛門の大に焦驟て此看的の白痴者めら物を買ふなら疾く買はずや我々が足り棒と予なりぬ尙見物して佇立みなば我が拳のさえを予見せんと眼を怒らせ大聲あげて罵りければ衆人のこれを見てすの此邊に隠れのなき魯智野の急性的が怒りしや後復て拳な喰ひると皆散々に逃去りたり忠次郎のこれにより只得藥囊刀棒を收拾て傍の茶店に預けおき進之助深右衛門に打伴ひ田毎橋の邊なる割烹店更科樓といふへ赴きけり斯て深右衛門の數多の酒肴を出させて人にすゝめ我も飲食するほどに三人の互に其身にありし事どもを語聞えつ

閑談時を移せし折から隣坐敷に人ありて泣聲しきりに聞えけり深右衛門の忿然に面を變してあな不興なることもかな疾く止まずやと怒りつゝ忽ち皿鉢を把て投附る聲を聞きて酒保いろがしく樓に登來て官人何事をかなしたまふ予静まりたまへ〜といへば深右衛門の眼を睜て汝が耳に隣坐敷の泣聲が入らざるか我客人を伴來ていさゝか一杯を進らするに何のために人を泣せて酒宴の興を妨ぐる予其由聞かんといきまけり酒保の頭を疊に摺附ていなは興を破らんなどいひ思ひもよらず彼の毎日此樓に來て客人達の招に應ずる歌妓にてしが心に悲むよしわれ覺えず泣きしにやはん取るにも足らぬ婦女子の事饒させたまへと賠るに予深右衛門のやゝ面を和げてろいかなる由ありて深く悲むにやらん此地と丹波嶋との傾分違へど我の應捕をも勤むる身なれば仕宜によりていたゞ開業にいなしかたし疾く此所へ運來りて事の仔細を告させよといろがし立れば酒保の應捕といふ詞を聞て一瞬にも及ばずして心を得て予退きけるかくて程なく十八九歳なる美貌女子と六十歳ばかりなる老人が恐るゝ出來りて召したまひし何の用にてし予やと

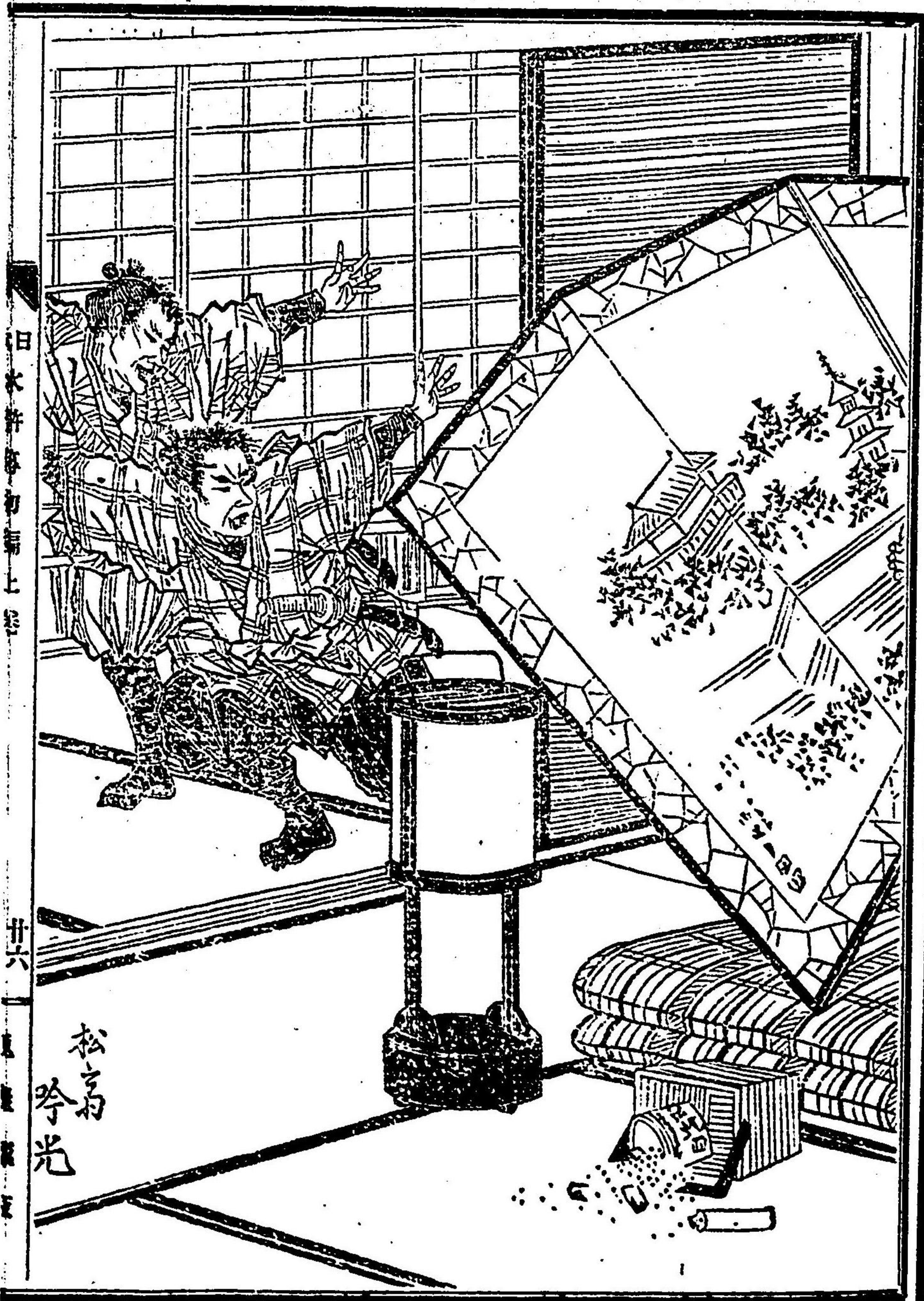
いひつゝ頭を下しかば深右衛門の近く進せて汝等いかなるよしありて泣悲て聲をばわげし予くはしく語れよ苦しからずと問はれて老人は涙をぬぐひ小人の越後國なる新潟の者にて名を金助と呼び又これなるの小人が一人女にて名をお翠と呼べていなり新潟の船着の港にて諸國の人の出入繁く市中に藝妓も多かれバ小人もお翠が幼時より歌曲三絃の稽古をさせ歌妓となしていに聊か志すとありて今度江戸へ赴かんとて國許なる家をしまひ父子遙々來りたる途中にて小人はからず病に罹り此地にて久く打臥したるまゝ多くもあらぬ路資の途に遺果したり病の程なく癒りしかど行くにも歸らんにも詮術こゝに谷りて父子毎に嘆く折柄こゝより程遠からぬ權堂村なる魚屋の主熊鷹屋惣藏といへるの常に博奕をもて半の生の業とし此邊にての勢強き者のよしなるがいかにやしけん女の色香を見初め外妻に抱へんとて支度金五十兩の証券をかゝせ已に引移らんとせしところ彼人の妻のいと嫉妬深くして早くも此事を聞附て夫にいたく追りしかば談の途に盤はざりきまゐるに彼惣藏の其性固より良らぬバ証券の金をばいまだ渡さざりしに已に金を渡せ

しどて責めはたると大方ならず最遠恨くの思へども翠の若き女の身といひ小人の又年老たり殊にの知識もなき旅の空言解く術もなきの涙を洒ぎつゝ只其負債を償さむために此首那首の酒樓をたのみて女が拙き藝を賣り僅の纏頭を貰受て金の利足に渡せどももし一日にても忘る時の責罵らるゝと絶間なし今日の此樓の坐敷に来て客人はなきやと待ちをるとて圖らず愚痴を言出て父子二人が泣きしなり其身の悲みに前後を忘れゆくりなくも官人達の喧嘩を破りしに大方ならぬ過なりき饒させたまへど打賄れバ女も共に口を添つゝ又も涙に咽びけり深右衛門の聞訖りいと憤りに堪へずして屢々太息を吐て汝等心を安くせよ事みな我身に引受て志す方へ出發せん何處を宿となしをる予やとよにたのもしく尋ねれば父子のいたく悦てもし然らむに再生の高思のほどいかにしてか報ひ奉るべきこゝよりの程近き大門前なる入込屋客四郎方を客舎に定めてはべりといふ其時深右衛門の懐中より金三兩を取出し今日のいさゝか酒錢を持來りしのみなれば持合は是れのみなり是ればかりにては最少しといひつゝ進之助忠次郎に打向ひ身等も持合あらば貸し

たまへといへば兩人の快く肯ひて進之助の十兩忠次郎の二兩を出しけり深右衛門の十五兩を一に合せて老人父子に與へ明日の此地を立去れかし慈藏が事の我身が引受けたり客舎の主がいかかくと留めんも料りがたけれどるの明日清早我が行て瑠明ん氣遣なせうと最深切に言論せば父子の夢あどばかり打喜び三人をひたすら伏拜みて勇みたちつゝ客舎をさして予回りける深右衛門等三人の又も酒を打飲てやがて打連れて樓を下るとして深右衛門の帳場に打向ひ酒錢の明日我が方より届けん予又序あらば我方へ取りに來んも妨げなしといへば主人の帳場格子を走出て又後日に來まさん時に一齊に纏て拜受せん毎度愛顧と蒙りて最有難くころはべれといひつゝ腕きて見送るを三人の回顧もせずいざとて共に立出しが街にいたりて各々手を分ち進之助の客店をもとめてこれへ宿り忠次郎の元の街へといろぎ行くなるべし斯て深右衛門の翌朝お翠らが客舎入込屋へ行て見るに父子の早くも旅装を整へて深右衛門を待て居りたればいそがはしく出迎て其高思を喜謝するほどに深右衛門はるの益なき口誼なりとくゝ行きねと促すに予も翠父子の些の行装を収

拾て已に門口を出んとするに予客舎の鋪丁の大にどろきていうがはしく押し止め
 其身父子の熊鷹屋に負債ありかねて惣藏のより托まれたれば其金の濟むまで
 其處一寸も出しがたしといふを深右衛門の大に怒りて其金の我が惣藏に還すべし
 かくても尙ほ欄住んどあらがふやといふを鋪丁の尙かにかくと言争ひしかば深右
 衛門は聲振立て憎き小所が振舞かないで物見せんと拳を擧て一打うちしに予前齒
 二枚を打折られ饒せくと逃入りたり客舎の主人も此勢に辟易して一句の言をも
 吐得ざればも翠父子の此際に飛ぶが如くに街に出東をさして赴きけり深右衛門の
 兩個時辰ばかり店頭尻打掛てお翠父子を落じやり今のはや中野の街を出離れた
 らんと思ふころ漸くこゝを立出て又直に權堂村へ赴きけりかくどの知らぬ熊鷹屋
 惣藏の折しも店頭に立出て近傍の青樓などへ魚を搬送らする主使をなすつゝゝ
 るどころへ深右衛門がつかくと入來りて其舖一節くれよとおほすれども惣藏の
 あらずもがなと舌打して立はだかりしまゝ應答をもせざりしかば深右衛門の怒り
 聲を怒らせてこゝな家主の倨傲なる客人の來るに挨拶せざる法やある疾く下に居

て會釋せよと呼はれば惣藏此方を振向て忙しきまゝに挨拶せざりき双刀帶せしが
 さばかりまてに尊き鉢鉢ほどな瘦土に物買はんずども苦しからず片腹痛やと罵
 れば深右衛門の聞きもをばらず眼を睨りて此白痴者の偽成言これでも食へといふ
 より早く傍邊にありあふ鮪の切身を取る手れそと惣藏が面をめぐけて投つくれ
 ば額にて切身の打碎け眼口も開かず血に染みたり惣藏大に焦熱て武家とても宥
 赦のならじ覺悟ひろげと叫びつゝ魚刀をひらめかして切てかゝるを深右衛門の腕
 さしのべて項をむつと引握み鐘の如き大音を振立ていかに素町人めよく承れ汝日
 ころ賭博を以て生業とし強きに詔ひ弱きを困しめ世の害をなすと大方ならずと聞
 えたり殊に此程旅遊者父子を誣て貸さいる金を貸せしと言徹し彼等父子が身の膏
 血を絞り取りしと強盗とやいはん獸心とやいはん汝に出るの汝に反る罪科のほど
 思ひ知れよと罵りつゝ鉄の如き拳を握り固めて眉間顛顛の嫌ひなく二打三打力に
 まかせて打たりければ惣藏いかでか溜るべき忽ち眼口より血を淋漓と流してのけ
 ずるところを深右衛門の猶ほ怒に乗じて大地に投つけ足もて助高を踏躪れば其儘



松高
吟光

息の絶えにける深右衛門もこれに驚きしかど猶もひるまぬ体に罵りて此偽者が敵するとのならざるゆゑ詐死をしたればとて誰かのこれに驚べけんといひすてつゝ悠々として熊鷹屋を歩出心が肚裏にて思ふやう我たい彼者を打懲さんと思ひしに圖らずも拳のさえに打殺せし過なりき此事上府へ聞えなば其罪免れがたかるべし疾く此處を落去るに優すことあらじと心の計較順に走りければ急歩にて權堂村を立出筑摩川の渡舟を上るより早くたゞ一走に丹波嶋なる下處へいたり些の盤纏を腰につけてすべての舊衣調度等の置去りにしたるまゝ早くも脱走したりける去程に熊鷹屋にて一二人の小所もあれども深右衛門が猛勢に恐怖れで一人も出て近くものだになかりしが深右衛門が出去りしを見て疾や遅しと走出て街坊隣舎に告知らせ懲懲をさまゝに介抱せしかども疾に息絶え又助るべうも見えざりければ頼て此處を本地の管應へ訴出にけり管應にての事の仔細を聞知て彼の魯智野深右衛門の隣領丹波嶋なる應捕なれば一應彼地の郡幸應へ照會せざれば捕に捕捉ることを得ずとて直に其事を丹波嶋へ告送りしかば丹波嶋の郡幸これを得て心ひ

ろかに深右衛門を頼みて彼深右衛門の武藝力量あるものながらたゞ其性格益齒なるゆゑ遂にさる過の做出したるならん假令これを庇保いんと欲するも事ごとくに至りての早爲むすべなしと嗟嘆して急に深右衛門が長屋へ下吏を遣して勾引んとせしに深右衛門已に脱走して下處に居らずと聞えしかば據なく事の趣を云々と文書に書寫て本藩へ注進したりけり因て本藩松代より江戸へ届出られつ江戸にての諸國へ告示し人相書を以て深右衛門が踪跡を搜索めらるゝこと最嚴重なりし去程に魯智野深右衛門の信濃を走出しより東に逃れ西に赴き其忙きとい夷家の犬の如く其急なるとい網を漏るゝの魚に似てさして行方も定めぬと行々て半月ほどを経たりし後大和國なる奈良の町を過るをり只見れば十字街の傍なる制札場に新に掲げし高札ありて看者數多佇立りて何事かと思ふに予深右衛門も立よりて歩をどいめ仰見るにもとより文字に疎けれど日常の文書ぐらゐの粗ば讀得れば首よりして讀下すに魯智野深右衛門云々と人相を書寫め末文に右の通の者於有之者其所へ留置は料は代官私領の領主地頭へ申出夫より江戸京大坂最寄の奉行所へ

中達すべくい、尤及見聞は、其段可申出、し隠置後日、脇より相知、い、可爲曲
 事、い、ありけれ、深右衛門、い、さて、我身の上、なりけり、と、驚く折、から、後邊、に、人、あり
 て、官人、其處、に、在、て、何事、を、か、した、ま、ふ、と、呼掛、け、つ、袖、を、曳、く、者、あり、深右衛門、の、阿、呀
 と、呼、て、い、ろ、が、は、し、く、回、顧、り、た、り、此、袖、を、曳、き、し、の、果、して、何、もの、予、又、深右衛門、の、身、の
 上、に、つ、き、て、い、此、後、い、か、なる、話、説、か、あ、る、前、に、挿、み、し、畫、様、を、観、て、其、餘、詩、を、味、ふ、べ、し

日本水滸傳初編上巻終

原本 金瓶梅

毎月發兌

通俗水滸後傳

毎月發兌

通俗後水滸傳

毎月發兌

通俗後西遊記

毎月發兌

通俗續三國志

毎月發兌

通俗續後三國志

毎月發兌

水滸傳西遊記金瓶梅演義三國志を漢土の四大奇書と稱するの世人の知る所なり演義三國志水滸傳西遊
 記の譯本世に行はるゝと已に久しといへども唯り金瓶梅に至ては未だこれを譯せし者あり又水滸傳
 後水滸傳後西遊記續三國志續後三國志の五書の前編を繕くもの、繼て讀まざるべからざるの論ある其
 作意の巧妙あるに反て前編に勝るを覺ゆ而して此五書も亦譯本なきの小説家の常に一大遺憾とする所
 あり是れ今般堅舖に於て右六書の譯本を印行する所以あり近來世間他人の新著書を重刻するの徒
 なし頗る尠からず其書率ね校字疎漏にして誤脱多く或は圖畫を省き本文を零し隨て製本も亦粗惡を極
 め大に著者の本意に背くの事ありたゞ自己一時の利を擡せんと欲するより他人の辛苦を水泡に歸せし
 むるに豈に廉耻を識らざるの甚だしきからずや右六書の如きも忽卒印刷に附し板權を請ふに違わらざ
 りしを以て尙し前條の如き徒ばかにして重刻せんと欲するあらば一應堅舖へ照會の上着手せられんを
 乞ふ

印行書舖生管 敬白

明治十五年十二月十二日出版御届
同 年同月十六日發行 (定價廿五錢)

新潟縣平民

著者 松村操

神田區佐久間町
二丁目十一番地

東京府平民

出版人 望月誠

京橋區南鍋町
一丁目七番地

東京南鍋町一丁目

發兌元 兎屋誠

大阪唐物町三丁目

大賣捌 同支店

東京芝三嶋町

同 山中市兵衛

